

ニューズレター 第 133 号・2026 年 3 月

日本カナダ学会

発行人：矢頭典枝 編集人：福士純・荒木隆人

事務局：〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155 関西学院大学国際教育・協力センター (CIEC) 矢頭研究室気付
TEL:06-6878-8255 ・ http://www.jacs.jp ・ jacs@jacs.jp 郵便振替口座 00150-2-151600
(お問い合わせの受付：電話でのご対応は不定期となっておりますので、お問い合わせはメールにてお願い致します。)

カーニー旋風と日本

飯笹 佐代子

今年 3 月、カナダのマーク・カーニー首相が来日した。カナダは伝統的に米欧との関係を重視してきたが、同政権は政治・経済両面の連携先をインド太平洋にも広げ、多角化を図りたいとの狙いがある。日本との間で「包括的戦略的パートナーシップ」に関する共同声明に署名したことは、大きな前進となった。

両国は民主主義や法の支配といった共通の価値に基づき、関係を一段と強化する方針を確認した上で、安全保障面では防衛協力やサイバー分野での連携を拡大し、自由で開かれたインド太平洋の維持に共同で取り組むとした。経済分野では、サプライチェーン強靱化、重要鉱物、AI や量子など先端技術、エネルギー協力を推進することで一致し、また、気候変動対策や北極問題、人的・文化交流の拡大も柱として、今後は具体的な行動指針となるロードマップを策定する。国際情勢についても、北朝鮮の核問題やウクライナ情勢などに連携して対応する姿勢を示し、包括的な協力関係の深化を打ち出した。

カーニー首相は高市早苗首相と共に臨んだ共同記者発表において、「世界的に困難な時期に、私たちが直面する好機を明確に表現した日本のことわざがある」と英語で説明した上で、「雨降って地固まる」と日本語で締めくくった。かつて米金融大手のゴールドマン・サックスに勤務していた時に、日本での駐在経験があると知って、より親近感を覚えた印象的なシーンであった。

すでにカーニー首相は、1 月にスイスのダボスで開催された世界経済フォーラム年次総会（いわゆるダボス会議）での演説によって、日本でも注目されていた。米中対立の激化により従来の国際秩序が揺らいでいると指摘した上で、同首相は、特定の大国への過度な依存は経済・安全保障のリスクになるとし、ミドルパワー（中堅国）が連携して依存を分散すべきだと主張したのである。

この演説は会場で喝采を浴び、異例のスタンディングオベーションを受けたとする報道もあり、各国のビジネス界の参加者や専門家の多くが、カーニー首相の深い洞察力を高く評価したという。当然ながら、即座にドナルド・トランプ米大統領はカナダを非難した。カナダ本国では対

(次ページに続く)

JACS Newsletter No.133 (March 2026) // 本号の内容：カーニー旋風と日本（飯笹佐代子）●
報告：トロントでのカナダ大学美術学会に参加して（下山雄大）●リレー連載：なぜカナダ研究をしているのか（第 17 回）：居場所を見つける旅（和泉真澄）●事務局より（第 6 回『日本カナダ学会賞』受賞候補作品の募集、「トラベル・グラント」募集について、第 39 回『日本カナダ学会研究奨励賞』論文募集、会費納入について（お願い）……………●編集後記

米関係への影響を懸念する声もありつつ、外交方針としての意義や自国がミドルパワーとしての存在感を示したことを評価する論調が目立ったようだ。日本においても、この演説に感銘を受けた識者や専門家から、日本もミドルパワーとしてカナダなどの国との結束を強化すべきという声が上がったことは記憶に新しい。

他方で、日本政府は上述の共同声明によってカナダとのこれまで以上の関係強化を歓迎しつつも、実はカーニー首相が呼びかける「ミドルパワーの結束」には一歩引いた姿勢にある。北大西洋条約機構（NATO）に加盟するカナダとは異なり、米国は日本の唯一の同盟国である。その米国を排除していると受け取られかねない枠組みに易々と賛同するわけにはいかないという事情があるからだ。そもそも、日本の政治家や官僚の中には、自国を「ミドルパワー」と認めること自体に否定的な雰囲気もあるようだ。

最近の「カーニー旋風」とも言える中で、カナダと日本の外交上の立ち位置の違いやミドルパワーとは何かについて、あらためて考えさせられた。本学会においても多くの会員が関心を持つ重要なテーマであろう。

（日本カナダ学会副会長・青山学院大学）

*

〈報告〉

トロントでのカナダ大学美術学会に参加して

下山 雄大

去る2025年10月18日、トロントのヨーク大学で開催されたカナダ大学美術学会（Universities Art Association of Canada、通称「UAAC」）のカンファレンスで研究発表を行い、またそれに伴って1週間程度現地に滞在しました。この渡航は、日本カナダ学会のトラベル・グラントを拝受したからこそ実現できたものです。修士課程で学ぶ私にとって、キャリア初期にこのような機会をいただけたことは意義のあることでした。審査をしてくださった対外

交流・社会連携委員会をはじめとする会員の皆様に厚くお礼申し上げます。本稿では、発表や滞在を振り返りつつ、大学院生の国際的な研究の遂行について考えます。

UAACは、カナダ最大の視覚・物質文化研究のネットワークです。毎年カンファレンスを開催し、『RACAR』というジャーナルを発行しています。昨年のカンファレンスでは、3日間で実に60を超えるパネルで議論が行われました。参加者も、大学教員や学生だけでなく、アーティスト、キュレーター、出版関係者と多様な顔ぶれで、日本の学会ではあまり感じるここのない闊達な刺激のある空間でした。

私は「Settler Colonial Art History Now」というパネルに登壇しました。セント・フランシス・ザビエル大学のErin Morton教授と同大学研究員のManon Gaudet博士がチェアを務めたこのパネルでは、美術史という入植者植民地主義とは切り離せない学問に携わる研究者が、個別の事例の批評的な分析を通して美術史と入植者植民地主義とを再考することを目指しました。具体的には、Sandi Stewart氏（ニュー・ブランズウィック大学博士課程）はハドソン湾会社によるオークションの分析を通じた文化の収集や売買の問題、Siobhan Angus教授（カールトン大学）は採掘と肥料をめぐる視覚文化を紐解くとみえてくる土壌の問題、Gabby Moser教授（ヨーク大学）は観客を巻き込む性質をもつ近年の作品からみえる美術館の制度の問題をそれぞれ起点に、北米社会と「美術」における入植者植民地主義やそれに対する学術的・実践的介入について論じました。（所属は当時のもの。発表の概要はあくまでも私の理解に基づきます。）

私自身は、修士論文の構想でもあった日系新1世の写真実践について論じました。第二次世界大戦後に日本からカナダへと移住したいわゆる「新1世」の写真家は、1970年代という多文化主義の萌芽の時代に初期のキャリアを形成しました。こうした写真家は、カナダ

国立映画庁写真部門や大学、出版社といったオンタリオの写真をめぐる機関の支援もあって、カナダ各地の風景や先住民コミュニティを描きました。カナダの風景表象における入植者植民地主義を論じた研究を援用しながら、私の発表は、風景写真が新1世の写真家をカナダの入植者植民地主義と採掘主義に基づくヘゲモニックな政治に統合していくソフトウェアになったと主張しました。

UAAC という大規模なカンファレンスに参加することは、たしかな収穫につながりました。まず、発表の審査から当日の発表まで、数多くの研究者に研究を示すことで、課題を明確にできました。発表は一度不採択になってしまったものの、他の発表者の辞退により繰り上げ採択になるという経緯があり、どのように書けば自分の研究の利点が伝わるのか真剣に考える機会になりました。当日は部屋に満員の聴衆から、取り上げた事例において白人性をどのように考えるのかという理論的な質問や、1970年代のカナダにおける日本の写真の受容をどのように考えるのかという歴史的な質問をはじめ、普段のコミュニティではなかなか得難いような鋭いコメントや質問をいただき、いずれも今後の主要な課題となりました。

そして、UAAC ならではの出会いも豊かになりました。特に、Angus 教授は近年の著書『Camera Geologica』において物質の視点から写真史を読み解く鮮やかなアプローチを提示して一世を風靡している方であり、私自身とても尊敬してきたので、一緒に登壇できると知って願ってもいない夢が叶ったような気持ちになりました。他にも、これまで著書を読んできた複数の研究者と話して、今後の研究のための貴重な示唆をいただきました。なにより、学士課程からの目標であった UAAC に参加しこのような出会いに恵まれたことに、これまでの失敗や挫折も多かった学生生活が報われたように感じられました。

一方で、その規模の大きさが災いするよう

なことも見受けられました。パネルの数が膨大だったためか、最初のパネルは朝早くから開催されており、雰囲気の高まりに欠けていて、発表者にとって良質なフィードバックがもたれているのか気がかりになってしまいました。カナダの大学では、数多くの学部で大学院生向けのカンファレンスが開催されています。私もそうした機会に発表者として参加したことがあります（2025年のトロント大学比較文学・映画研究学部合同カンファレンス、同年のクイーンズ大学美術史学部カンファレンス）、熱心な聴衆から有益なフィードバックをもらい、友人もできました。大学院生の場合は、大きなカンファレンスを狙うのもよいですが、こうした大学院生向けの機会も視野に入れることで、有益な渡航にできるかもしれません。

UAAC 以外にも、トロントでの滞在には実りがありました。私は2024年9月から翌年4月までトロント大学大学院に研究生として留学していたため、戻ってこられたことが非常に嬉しく、セント・ジョージ・キャンパスの通りを歩いたときには感無量になりました。研究面では、トロント大学で開催された学術ワークショップに聴衆として参加し、そこで声をかけた先生に後日面談をしてもらって有益な助言をいくつかいただくことができました。また、ヨーク大学やオンタリオ美術館のアーカイブを閲覧しました。トロント大学図書館のメンバーシップに加入したので、同館の資料も閲覧できました。（気軽に加入できるので、トロントに滞在される方には非常におすすめです。）研究以外では、お世話になった先生方や友人に再会したほか、トロント現代美術館をはじめとするミュージアムを再訪し、現地の文化の理解を深められました。

今回の渡航は、トラベル・グラントの恩恵によるものです。研究費のあてが特でない私にとって、学会から満額の助成をいただけたことはかけがえのないことでした。他の人文・社会学系の学会でトラベル・グラントの設置は珍しいなか、カナダ学会の取り組みは非常に心

強いものです。ただし、申請の段階で800語以上もの長さの発表概要が必要であり準備に時間がかかる点、グラントは費用の一部を補填するものとはいえ今日の航空券の価格高騰を踏まえれば心許ない点には、改善や拡充の検討の余地があると思います。いずれにせよ、非常に優れた研究支援であり、ぜひ今後も運営されていくことを願います。

蛇足かもしれませんが、カナダでの研究発表を控える大学院生のために、2点実践的な助言を述べます。1つは、現地の大学をうまく活用することです。カナダの大学の先生は、メールやワークショップで声をかけたらその後面談をしてくれることもあるので、ぜひネットワークづくりを大事にしてください。また、今回宿泊したのはトロント大学のゲストハウスでした。ホテルや「Airbnb」の宿泊先は足がなくても、大学の寮やゲストハウスであれば比較的安価に泊まれることもあります。2つ目は、配車アプリ「Uber」をダウンロードし、電話番号認証を済ませておくことで、カナダですぐ使える状態にしておくことです。公共交通機関が便利でなかったり、夜間の外出をしたりする場合、すぐに車に乗ることがトラブル防止になるでしょう。

トラベル・グラントという素晴らしい制度により、多くのキャリア初期の研究者が学会発表を経験することで、カナダ研究の発展につながることを祈っています。私自身、今回の経験を活かして研究を継続し、会員の皆様からの学恩に応えられるよう努力したいです。

(東京大学)

*

<リレー連載>

なぜカナダ研究をしているのか (第17回) 居場所を見つける旅

和泉 真澄

最初に研究対象としてカナダに触れたのは学部ゼミだった。東京外国語大学の英米語学科で英語と国際関係を学んでいた私は、カナ

ダではなくオーストラリアを研究していた。小学校の最初に親の留学でシドニーに滞在したことがあり、その時の父の指導教授の家に高校生の時にもホームステイしたので、オーストラリアに親しみはあった。小さい時から「ネルソン先生」という名前は頻繁に聞いていて、彼の娘さんが私と同学年であったことも関係していたのだろう。ビッキーちゃんとは小学校以来、時々エメールやエアログラムで文通もしていた。

そんなわけで大学ではオーストラリアのことを研究することに決めていたが、語学・文学が中心の当時の英米科で国際関係のゼミは小浪充先生のものだけだった。小浪先生の北米史の講義は一年生の時から取っていたが、いつもニコニコと政治、経済、文化の話題を織り交ぜた語り口が非常に楽しく、教科書がピーター・キャロルとデイビット・ノーブルの *The Free and the Unfree* だったのを覚えているくらいだから、やはり印象に残る授業だったのだろう。もっとも学部生の時に学術書をしっかり読みこなすような英語力は持っていなかったもので、内容理解は先生の語りに完全に依存していたと思われる。

3年生でゼミに入ると、同学年だけでなく4年生や大学院生も参加していて、そこでカナダ学会現会長の矢頭典枝さん、会員の鈴木健司さん、後に全カナダ日系人協会 (NAJIC) 会長となるエリック・ソクガワさんなどと出会うことになった。夏の合宿にはラムゼー・クック先生も参加され、当時はわからなかったが、まさに日本のカナダ研究を担う方々が輩出されて行く空間の末席にいたのだと思う。卒業論文はオーストラリアとアメリカ合衆国の難民政策の比較をテーマとしたが、小浪ゼミのお陰でカナダの政治や歴史に触れられた2年間だった。

卒業後いくつかの偶然が重なり、オンタリオ州のクイーンズ大学大学院に進学することになった。国際関係に興味があったので政治学研究科に行くことにした。世界で何が起きているか、人々はどんな暮らしをしているのか、困っている人はなぜ困っているのか、ど

うすれば困らなくなるのかといった疑問を解き
たかったのだが、政治学を勉強してみて、あ
まり人間が出てこないことに気がついた。修
士論文は指導教授の助言で日本の近代国
家の発展過程について「なぜ成功し、なぜ
失敗したのか？」という観点から考察する
ことになった。日本学や政治史、文化論など
をいろいろ読んでまとめただけのものだった
が、自分なりの結論は「近代化によって生
じたさまざまな不平等や経済的矛盾、社会
の構造的不公正の是正に正面から取り組む
代わりに、ナショナリズムや文化的イデオ
ロギーを喚起し、人々の不満を問題のあり
かとは別の方向へ誘導することは、もとも
とある社会問題をより深刻化して最終的に
全体主義や戦争といった破滅的な状況へと
国家を導く」というものだった。未熟な
議論ではあるが、結局現在のアメリカや
日本、さまざまな国や地域が迎えている
危機は、修論で観察したこのような世論
と政治の悪い流れをまさにたどっている
ように見える。

修士修了後、帰国してアルバイト生活をして
いたところ、日本移民学会創設の新聞記事
を偶然見かけた。会場の立命館大学が家
の近くだったので興味本位でのぞいてみ
たところ、同大学に北米日系人の歴史と
文化を研究しているグループがあること
がわかり、メンバーの**佐々木敏二**先生に
連絡した。こうしてアカデミアに所属が
ないままに日系文化研究会で勉強するこ
とになり、佐々木先生の非公式の弟子と
して本格的に移民研究の世界に入った。日
系アメリカ文学の**山本岩夫**先生、**桧原美
恵**先生、歴史学の**下村雄紀**先生や**坂口
満宏**先生らと一緒に月一回の研究会に参
加し、懇親会で話を聞くことで「学者の
世界」がだんだん見えてきた。佐々木先
生からは最初の何年かは「女はいずれ研
究の道を離れるから鍛え甲斐がない」と
愚痴を聞かされたが、翻訳プロジェクト
やカナダの現地調査にも同行させてくだ
さり、そのうち同志社大学大学院アメリ
カ研究科の博士課程に入学したことで

アカデミアでの居場所も得ることができた。

「なぜ移民に興味を持ったのですか？」
という質問はよく受けるが、その答えは
自分が自ら帰属している社会に馴染んで
いない感じる感覚と関係していると思
える。子どもの頃からそうであったし、
特にカナダ留学から帰国した後、深刻
な逆カルチャーショックに陥った。その
原因を知るために日本文化論を独学で
勉強したが、「結局日本に対するステレ
オタイプをなぞるだけなのではないか？」
という疑問にぶつかった。政治学と日
本文化論の両方で壁に当たった私に、
別の社会に出ていった日本人について
歴史学の視点から研究することが、も
とと解きかかった人間と社会正義に関
する国際的問題と自分の帰属意識をめ
ぐる心地悪さの両方の考察を可能にし
てくれた。方法論としては、時の経過
のなかで埋もれた細かい事実を発掘し
、人間の生き様をストーリーとして語
り、書き、後世に残すという歴史学的
事例研究が、自分にとってもっとも好
奇心を刺激され、追求して楽しい研
究手法だと気づいた。研究成果を本や
論文で発表するだけでなく、北米日
系資料の掘り起こし、聞き取り調査、
資料を後世に残すための複製や保存を、
1980～90年代に日系文化研究会を
はじめとする諸先生方がカナダやア
メリカの日系コミュニティからの協
力を得つつ行なっていなければ、日
系人史のかなりの部分は失われていた
と思う。こうして振り返ってみると、
私もまた彼らの仕事を結果的に引き
継ぎ、現在に至っていることに気づく。

大学院博士課程の途中でビクトリア大
学に留学し、バンクーバーを中心に日
系カナダ人コミュニティ活動家への
インタビューや「沈黙の時代」と言
われる1950～60年代の資料の発掘
を続けていくなかで、多くの友人を
得て同志とも言える数々の関係を築く
ことができた。「毎日の多文化主義
(multiculturalism in everyday way)
」を精力的に実践した彼らは、リド
レスを実現しただけで満足せず、現
在でも不正義に対して声を上げ続け
ている。

本当に凄いことだと思う。一方、近年日本でもカナダに移民していた人々の子孫がファミリーヒストリーの掘り起こしを熱心に展開するようになってきている。研究者とコミュニティの間、日本とカナダの間、そして移民の記憶を当事者として持つ世代と、いったんその記憶から切れてしまい、再び過去とつながろうとしている若い世代との間をつなぐ仕事が、現在の研究活動の主要なテーマである。やらねばならないことが山ほどあって本当に大変だが、このトランスパシフィックな「間」の空間が今の私の心地良い居場所となっている。

(同志社大学)

* * *

(((事務局より)))

◆第6回『日本カナダ学会賞』受賞候補作品の募集

日本カナダ学会賞は、日本におけるカナダ研究の優れた成果を顕彰し、カナダ研究の発展に資することを目的として、カナダに関する優れた邦語書籍及びその著者に対して授与する学術賞として、日本カナダ学会が2014年10月に創設しました。この度、第6回受賞候補作品を募集します。皆様からのご応募・ご推薦をお待ちしています。(1) **対象作品**：①カナダに関する邦語書籍（学術書、翻訳書、啓蒙書等）。固有のISBNを有するもの、②全体の8割以上が日本語で記述されているもの（ただし、日本語と他言語で同一の内容を記述されているものである場合には、日本語で記述されている割合が、全体を記述言語数で除した割合以上であること）、③2024年1月1日から2025年12月31日までの間に刊行されたもの。(2) **審査**：日本カナダ学会賞委員会において審査を行います。推薦者（自薦・他薦可）は、該当書籍2冊と推薦書（自由形式、A4・1枚以内）を添えて、郵送により、ご応募ください。なお、応募書類・当該書籍は返却しませんので、あらかじめご了承ください。

(3) **応募期間**：2026年4月1日～4月30日(必着)。(4) **提出先**：〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学国際教育・協力センター(CIEC) 矢頭研究室気付日本カナダ学会事務局宛。(5) **受賞作品の発表及び表彰**：受賞作品の発表及び表彰式を、2026年9月に開催される第51回年次研究大会で行います。受賞作品の著者に対し、正賞(授与記)及び副賞(賞金10万円。翻訳書の場合、賞金8万円)を贈呈します。(6) **問い合わせ**：電子メールにて事務局(jacs@jacs.jp)まで。

◆「トラベル・グラント」募集について

2026年度(2026年4月1日～2027年3月31日)までの間に、カナダおよびカナダ以外の国(日本を除く)で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。(1) **支給金額**：上限10万円とする。(2) **支給対象者**：募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。(3) **応募書類**：①本学会所定の応募用紙(日本カナダ学会のホームページに掲載)、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書(メールも可)、③出張に関する費用(航空運賃、滞在費、参加登録料など)の見積書。(4) **出張後の義務**：①帰国後2週間以内に報告した原稿を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書(学会ホームページ掲載の所定の書式)。③eチケットもしくは搭乗券半券のコピーの提出、④ニューズレターにおい

て「海外学会報告」について執筆すること。

(5) **その他の事項**：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額（10万円）が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。

(6) **審査方法**：日本カナダ学会理事会における審査機関（対外交流・社会連携委員会）により事前審査を行い、それぞれ5月、9月、1月の理事会にて最終決定します。(7) **応募締切日**：2026年4月末日、同年8月末日、同年12月15日（年3回）。(8) **送付先**：〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学国際教育・協力センター（CIEC）矢頭研究室気付 日本カナダ学会事務局宛。(9) **問い合わせ**：電子メールにて事務局（jacs@jacs.jp）まで。

◆第39回『日本カナダ学会研究奨励賞』論文募集

日本におけるカナダ研究の促進と育成を目的として、優れた研究論文を募集します。(1) **応募要件**：カナダ研究に関する論文で、応募締切日より起算して過去一年以内に発表されたか、未発表のもの。テーマや領域は問わない。用語は日本語・英語・仏語のいずれか。(2) **応募資格**：日本国民又は日本在住者であって、応募締切日において次のいずれかに該当する者、(a) 大学院に在学している者、(b) 大学院を修了又は退学してから5年未満の者、(c) 満40歳未満の者。(3) **原稿枚数**：邦文は横書きで400字×80枚相当を上限とする（含・図表/脚注）。A4判ワープロ仕上げが望ましい。欧文は15,000語以内（含・図表/脚注）＝A4判ダブルスペース。いずれの場合も1論文につき、コピー2部（正副合計3部）を送付すること。著者名、論文名、所属、略歴、連絡先（郵便及び電子メール）をカヴァーレターに明記すること。また、応募書類は返却しない。

(4) **論文の推薦**：応募要件に該当する既発表論文について、執筆者が応募した場合のほか、学会理事が推薦した場合、これを他薦の審査対象論文として取り扱う。(5) **締切**：2026年5月31日（必着）。(6) **送付先**：〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学国際教育・協力センター（CIEC）矢頭研究室気付 日本カナダ学会事務局宛。(7) **賞・賞金・特典**：最優秀論文賞1名に正賞および副賞（5万円）。優秀論文賞（佳作）2～3名に正賞および副賞（2万円）。なお最優秀論文賞の受賞論文は、未発表のものに限り、規定に基づいてカナダ研究年報に掲載することができる。(8) **発表および授賞式**：2026年9月、第51回年次研究大会にて。(9) **問い合わせ**：電子メールにて事務局（jacs@jacs.jp）まで。

◆会費納入について（お願い）

現在会費の納入を受け付けております。また、前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去3年分（当該年度を含まず）の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うこととなりますのでご注意ください。**一般会員**：7,000円・**学生会員**：3,000円（学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと）。郵便振替口座：00150-2-151600。加入者名：日本カナダ学会。他金融機関からの振込の場合は、口座番号：ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座 0151600 ニホンカナダガツカイ。自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします（自動振替による口座引落は7月です）。ご協力願います。なお会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

* * *

★**編集後記**・・・4月5日現在、アメリカとイスラエルによるイランへの軍事作戦に端を発する中東地域の緊張が非常に高まっています。アメリカの隣国であり、国内に多くのユダヤ系住民やイラン系移民も抱えるカナダは中東地域の緊張緩和に向けていかなる役割を果たすことができるのか、ミドルパワー外交としてのカナダの国際社会における行動を今後注視したいと思います。……………(A)